

# ブルー の理由

トキオ



“明日がある”なんて嘘っぱちさ  
ただ、“今”があるだけなんだ。  
君は何を信じるんだい？  
目の前にあるリアルのほかにはさ。

## 青の瞬間

---

色も形も  
ハッキリしない  
時間が過ぎていく  
信号の変わる  
瞬間  
まばたききをして  
乗り遅れてしまう

去年投げた  
ゴールデンリング  
頭の後ろにぶつかって  
影を踏んだ  
時の流れが変わっていく

君の呼び声が  
鋼鉄の山々へ  
響き  
わたる

僕がメガネを落として  
ガラスの破片をあつめていると  
世界は  
やがて  
夜になっていた

## Now The Time

---

はじめまして、こんにちは。  
世界のありとあらゆる偽善者たちよ。  
目を覚ます必要なんかないんだ。もちろん、諦める必要だってね。

僕は歩く者。僕は考える者。僕は問いかける者。僕は許す者。  
僕は形作り、僕は奏で、僕は歌い、僕は愛する。  
そして僕は、、、  
ときどき傷つける者。ときどき奪い去る者。ときどき諦める者。ときには殺める者。  
僕は笑い、足掻き、苦しみ、祈り、すこしばかりは満足し、常にいつも空腹。  
ああ、僕だって、  
神の不在を確信していてもなお、祈ることがができるくらいには偽善者さ。

僕は君に問いかける。

でも勘違いなんかしないでおくれ。それは決して君の為なんかじゃあない。  
いつだって僕自身の為間違いなんだからさ。

僕らは生まれついでの大嘘つき。  
ヤツらがそうするってんなら、こっちだって相応の対応をしてやるまでさ。  
ああ、このクソツタレの世界はなんだか、サビ臭い匂いがしてら。  
それでも、お前さんは希望が在るっていうんだろ？  
夢は叶うってさ。  
まあ、抜け道のひとつや二つは見つかるだろうさ。  
でもね、忘れちゃいけない。  
ひとつ手に入れたら最低二つは失うもんさ。  
50 : 50 (フィフティ フィフティ) なんかない。  
だからうまく騙して切り抜けるんだ。

## Image

---

ときどき僕は思うんだ。

例えばナメクジだったらどうだろう？ってね。

カタツムリでも芋虫でもいい。

つまりは、そんな程度のスピードでしか歩けないとしたらどうだろう？ってね。

もちろん僕は歩くのが早いほうじゃないし、歩く以外のことにしたってすべてのアクションが早くてわけじゃない。

それは分かってる。言われるまでもなく分かってるつもりさ。

それにしたって、あの可哀想な軟体動物達に比べればずいぶんとマシだと言えるだろう？

そんな僕らのスピードが、例えばナメクジ程度だったらどうだろう？ってね。

ずいぶんと不便そうじゃないか？

何かひとつくらいいいことなんてあるのかな？ってね。

ときどき僕は考えるんだ。

ほら、ご覧よ。

公園の裏の水たまりにメダカが泳いでら。

長くても一週間以内にゃあ干からびてしまうっていうのにね。

まるで気持ち良さそうに泳いでやがるんだぜ？

The End of World

まぎれもなく、まもなく世界の終わりがやってくるっていうのにさ。

それに気づきもしないんで、なんて不幸なんだろうってね。

ああ、でも

ときどき僕は思うんだ。

ときどき僕は心配になるんだ。

宇宙の果てで、取るに足らないヤツらがぼくらを見つけて

「なんて可哀想なヤツらだ」

なんて思っちゃいけないか？ってね。

## Good-by World

---

「明日世界を終わらせることにした。」

突然、友達がつぶやいた。

感想だって？

そんなこと気にしてやがるのか？

って言いたかったけど、まあ一応、友達だという関係なわけだしやめておいたよ。

僕にだって社交性ってもんは備わっているってことさ。

「ああ、そうだな。それもいいかもしれないぜ。

いずれにしたって、明日は同じ。みんな同じ結末なんだからね。

遅いか早いかの差だけさ。

でも、なんで明日なんだい？今日じゃなく。」

おっといけない、思わず余計なことを言っちゃった。

でもさ、そうだよな。そうだよ。実際のところ僕にしてみりゃ「勝手にしやがれ」だぜ？

なるほど、自分ではじめることは出来なくても、自分で終わらせることは出来るってわけか。

Good-by World！

生を選べない人もいるんだよ

Good-by World！

生きたくても生きられない人もいるんだぜ？

ああ、もちろん、どうしてもってんなら止めはしないさ。

でもね、どうかそうやって僕に責任を残していったりしないでくれ。

僕らはひとりきりで生まれ、ひとりきりで死んでいくんだとしたってさ。

ひとりきりで生きていく分けじゃあないんだからね。

そうだろ？

## 自己紹介

---

ごきげんよう

こんにちわ

僕は歩く者

雨の日を

夜の中を

街の間を

僕は歩く者

走り出すほど急いじゃない

立ち止まる余裕はない

ぼんやりとした輪郭が

もうほんの少しハッキリとするまで

鮮やかだった色が

また

とりもどせるまで

僕は歩く

もう少し

まだ

もう少し

## 僕の好きなモノ

---

雨

レインコート

夜

スプリンクラー

クリームソーダ

ミートソース

ガラスの割れる音

非常階段

クラクション

ネオンよりは街灯

街路樹

サイレン

信号の点滅

縁有り眼鏡

サンドブーツ

ジッパー

ハンチング帽

自動巻時計

針の音

砂時計

冬

月夜

ジーザスもしくはシッダルータ

地下鉄の最前列

ライ麦

アップル

サリンジャー

ビート

UKという響き

オールナイトムービー

トライアンプ

乗ったこともないモーターサイクル

赤いギター

ハモニカ

水たまりに映った空

詩

言葉

不連続な印象

連想ゲーム

ナンセンス

平和

ブルー

そしてきっと自分自身



## マイウェイ

---

僕は僕でいそがしい

明日までになんとかしなくちゃいけないからね

うまい話はもちろん

うまそうでない話にしたって

きっと裏があるんだぜ

僕は騙されやしないさ

だからこうやって時々言いまわしを変えてみせるのさ

## ファーストコンタクト

---

なあ君

どこまでいくんだい？

僕かい？

僕は君が行くちょうどその方角さ

待ち合わせというなら

君を待っていたのさ

だからそろそろ出かけないか？

時間ばかりはあまりないんだ

## 人生

---

つまらないものとくだらないモノがいくつかあって  
楽しいモノと役立つことがいくつかあった  
人生にはいつだってバランスが必要なんだ  
片方ばかりってことは無いんだからね

## イタミ

---

イタミとはサイン

だからココロのイタミはココロのサイン

君のイタミを僕がどうにか出来るだなんて思っちゃいない

代わりになってやることも

和らげてやることさえ出来ないんだ

でもね

楽しいことは一緒にやれるんだ

一緒に笑うことだって出来るんだ

## 真実の果実

---

青い夜はこおりつく  
ウラギラレタリンゴ  
持ってたら  
僕に貸してよ  
皮をむいて  
いちばんおいしい  
真実の実を  
食べさせてあげるから

## ライ麦畑の子供達

---

ライ麦畑の子供達は  
木の上の青いリンゴに手をのばしてる  
わき目をふらず  
いっしょうけんめい

きをつけした  
ポプラ並木を歩いてる  
とがった目をした人達は  
気づかない  
そこにリンゴの木があることを  
壁には  
リンゴの絵がはってある

## 冬のハモニカ

---

やがて君が  
ちょっとだけ君になったら  
僕は誇らしげに  
ハモニカ吹いて  
静かな夜を楽しもう  
もし君がただひとつのBow Iに  
ふたつぶの涙を  
落とそうというのなら  
子供のころには  
もどれない  
今もStreetには  
Bombが散らばり  
君に拾われたいと願ってる  
僕はハモニカ投げ入れて  
すこし陽気な顔をする  
“ここにはないよ”  
と言うから  
転ばないで  
とは言わない  
僕は口笛で  
とびつきりを吹く  
唇がさびしい  
から  
君にどうにかして欲しい

## アンブレラ

---

傘が飛んでいってしまったので  
ずぶ濡れだけど 気持ちがいい  
水たまりを飛び越すには  
何年か  
かかりそうなので  
泳いでいたら  
雨がやんだ午後



## 誰かのカテゴリー

---

結局はそうだ

僕らはそうするしかないんだ

生まれる前から誰かにつくられた何かのカテゴリーに属するのさ

男だとか女だとか

大人だとか子供だとか

白人だとか黄色人種だとか

給料が高いとか安いとか

強いとか弱いとか

いいか悪いかじゃない

結局

その中でなんとかするしかないんだ

## 秘めた赤

---

愛は赤

ハートは赤

なぜだろう？

血の色かしら？

僕の印象

君への言葉

紅（くれない）に色づいて

赤い心臓はいつだって

ボディに隠されたまま

カラダのまん真ん中で

色めくハートは

今夜

君を求める

## 明日があるさ

---

“明日がある”なんて嘘っぱちさ  
ただ、“今”があるだけなんだ  
君は何を信じるんだい？  
目の前にあるリアルのほかには

## イミテーション

---

キミを囚えるビジョン  
空白ノ世界で  
悶える光を押し殺して  
完璧にキリトラレた闇の中に  
身を委ねようと足掻いている

純白なのか？  
漆黒なのか？

目を閉じるなら  
つまりは同じようなもの  
うずくまるココロの住処  
逃げこむための巣穴  
とどく範囲の理想  
今も探している

間にあうか？ではなく  
辿りつけるか？でもない

キリトラレた瞬間の連続だけが  
生の真実

## 青いバウンズボール

---

バウンズボール

バランスは確か

中心点に向かってダイブ

鼓動を抑えてジャンプする道化師の勇敢な心は

決してバレてはいけない

決して理解されてはいけない

僕は君に悲しみをとどけるためにやってきたわけじゃないんだ

必要なら泣いてもみせるさ

でも

それは今じゃない

100%

まちがいなく

棒の上で回転してる皿は落ちて割れてしまうのさ

それは運命なんかじゃなく

確かなバランスで回ってる

このバウンズボールの上で

与えられた役割なのだから

## スーパーノヴァ

---

僕は見た  
スーパーノヴァ  
深遠なる闇の中で  
加速する未来を

僕は見た  
スーパーノヴァ  
虚無の中で育まれた光を

拡散していく希望も絶望も  
君の中から生まれたんだ  
明日でも昨日でも大した違いはない

僕らは見た  
スーパーノヴァ  
すべてがひとつになる日を

僕らは見た  
スーパーノヴァ  
たったひとつのことが  
すべてとなる日を

スーパーノヴァ  
スーパーノヴァ

あの日確かに  
スーパーノヴァ  
僕らは見たんだ

## 好き嫌い

---

ときどき僕は自分が嫌い  
ときにはまれに自分が好き

新しいコトをはじめようと  
せいいっぱい両手を広げてみた  
新しいモノをつかみとろうと  
ぎゅっと手を結んでみた

魚たちの影が水面から散っていくように  
僕の手をすり抜けた何か  
君に伝えようとして口を動かしたけれど  
風の音しかきこえなくて

ときどきうまくいったとしても  
たいていは思い通りにはいかない

でもね

きっと否定を肯定したときに  
気持ちは自由になるんだ

だから

ときどき僕は自分が嫌い  
ときどき僕は自分が好き

## 僕の中の僕

---

僕の中にある僕を  
君にぶちまけてやるほど  
僕は気前はよくないんだ

クヨクヨするなよって？

そんな風に見えるのかい  
君とは結構うまくやれるって思っていたのに

そんな風に見えるのかい？

ああ  
そりゃあ僕だって落ち込んだりはするさ  
でもね  
それはさっきじゃない  
今、まさにこの瞬間に生まれた感情さ

理解してほしくたって  
手の内はみせやしない  
なんで分かってくれないんだ！  
って吠えたって  
分からせようと努力なんてしないんだ

知ってるぜ  
君だってそうだろう？



## 冷たい雨

---

冷たい雨が君を濡らす  
冷たい雨が君を凍えさせる

僕の手は  
ほら  
小さすぎて  
すべてを覆い隠すことはできない

新しい夜と  
古い朝が交わる時

僕の声は  
ほら  
小さすぎて  
すべてを届けることはできない

冷たい雨が君を濡らす  
冷たい雨が君を震わせる

一生懸命すぎたんだ  
きっと  
急ぎすぎていたんだ  
でもね  
だからといって  
ふりかえることはできない  
やり直すことなんてできやしない

冷たい雨が君を濡らしても  
冷たい雨が君を凍えさせても  
冷たい雨が君を震えさせても  
冷たい雨が君を戸惑わせても

すこしだって気にしないそぶりで  
物語を終わらせるようにはじめるんだ

## 失われた世界

---

ここにはありませんか？

誰かが尋ねた

ここではありませんよ

僕は答えた

彼が何者だとしたって

盗まれるわけにはいかないんだ

この気持は本物

誰かに台無しにさせたりはしない

守り続けなければならないんだ

戸を叩く音が聞こえて

僕は目をさました

僕の手はすりむけて

なんだかジンジンと痛むんだ

眩しい光に向かうと

僕の口が動いた

君に何か尋ねてる

ああ、そうか

そうなんだ

分かっていたんだ

君は静かに

そして確かにこう言うんだ

ここではありません

ってね

失われたモノはいつだって

とりもどせやしないっていうのにさ

## 囚われた空

---

僕は必死に跳ぼうとした  
手を伸ばし捕まえようとした  
高い高い空の下で  
運命を感じるのはまだ早いと思っていた  
落っこちたメダルを拾おうとただけ  
そう  
オモチャのメダルを拾おうと目を落とすただけなのに

グ  
ラ  
ン  
ツ  
！  
と

世界は音を立てて反転しはじめた

君の足の下にある空を見上げて  
僕は必死に飛ぼうとした  
もしかしたら羽根があるんじゃないか？って思って  
両手をばたつかせた

目を覚ませばいつだって  
僕は地面に這いつくばって  
右足を一步  
左足を一步  
全力で持ち上げながら歩いている

そうさ  
飛び上がるなんてできない  
僕の背中に羽根なんかないのだから  
でもね  
ほら  
足があるのさ  
だから

歩いて歩いて歩いてやるさ

一歩だって譲れない

歩いて歩いて歩ききってやるんだ

## 君に会いたい？

---

会いたいと思う

会いに行きたいと思う

時間がないという

忙しいという

限られた砂粒が一粒ずつ落ちて行く

光は陰りまた光りまた陰る

同じ毎日だという錯覚

明日も同じように歩いていけるという錯覚

正しい輪郭を狂わせ

愛しい人を遠ざける

君ではないと思ったかったのか

君だけだと信じたかったのか

鈍く光りだした空の下から

のっそりと起き上がった衝動が

抜け殻の僕を離れ

激しく君を打ちつける

## ブルーの理由

<http://p.booklog.jp/book/31976>

著者：トキオ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokion/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31976>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31976>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.